拙堂會報

発行所
齋藤拙堂顕彰会
事務局
津市大谷町 208-175
常務理事　中川禎二
Tel 059-226-2722
印刷　伊藤印刷株式会社

巻頭言　齋藤正和　1
拙堂碑説明板にQRコード　5
旅人拙堂　加藤龍宗　2
俳句・短歌・書道の作品募集　5
拙堂と経世　飯田俊司　3
月ヶ瀬観梅バス旅行　5
拙堂顕彰碑の清掃完了　4
拙堂今昔　6
墓地説明板・吟道大会　4
会員名簿・寄稿のお願い　7～8

語り継ごう　齋藤拙堂
山口人づくり財団の事例

会長　近影

今年は明治維新から百五十年というので、山口県では記念行事が盛んであり、維新のとき活躍した僧月性が拙堂と親交があった関係で、月性記念館がある山口県柳井市からはいろいろ資料を送って来られる。そのなかで、この財団の注目すべき事業活動を発見した。

江戸時代から今日までの山口県出身の先人をとりあげ、その一人ひとりについて関係深い小中学校に児童生徒十名程度の研究グループを組織してもらい、メンバーが先人の研究をして報告書にまとめるのである。これまでに七十人ほどの先人を取り上げている。それは吉田松陰や高杉晋作のような人だけではない。金子みすず、田中絹代、種田山頭火、日野原重朗といった人も含まれている。できた報告書はこれまでに九冊の冊子にして刊行されている。各学校のグループメンバーが語り部というわけだが、その先人に詳しい大人が学校へ行って指導助言をしている。若い語り部達は「先人の勇気、指導力で今日の平和な日本があることがわかった。これを語り継ぎ未来につなげたい」と張り切っている。津の小中学校にもそんなグループを作り、我々拙堂会の会員が指導助言に当たることができたらよいがと思うのである。

昔は語り部という特別の人々が祖先のことを伝承した。今は文字や画像を利用して誰でも語り部になれる。そのひとつを「山口人づくり財団」の活動に見ることができる。

齋藤拙堂顕彰会　会長　齋藤　正和

旅人拙堂　月ヶ瀬に遊ぶ

理事長　近影

抑々、拙堂を旅に駆り立てたものは何であったのか。その要因の一つに中国の詩人達への〝憧れ〟が考えられる。彼等が旅で詠った世界、決して見ることのできない幽玄な「桃源郷」への想いではなかったか。二十四歳の青年拙堂は江戸を立ち伊勢へのおよそ四百粁の旅をした。江戸の町とは異なり豊かな自然と田舎の人々にふれ、青年の心は大いに躍動した。二十七歳で初めて京に上り、都の風情にふれ、風雅の世界を垣間見たことにより拙堂の心は益々開かれた。

二十九歳、三十歳と京・奈良・吉野に遊び、三十二歳の一八三〇年二月十八日、予てよりの願いであった月ヶ瀬梅渓への旅を実行した。わずか三日（上野より）の小旅行ではあったが「月宜し」「雪宜し」の世界を堪能した。「月ヶ瀬記勝」のなかで、陶淵明や高啓、林和靖等の詩を引用し、杭州の弧山、広東省の羅浮、蘇州の鄧尉等梅の名所に比喩し、「雪月花」の幽玄の美に酔い、良友と吟じ酒に酔い、最高の時を楽しみ、十律、五絶に詩を詠じ紀行文を留めている。その一つに次ぎの詩がある。

梅辺清絶』　竹辺幽なり
罨画の』　渓中桂舟を蕩す』
雲淡く風香る』　春の両岸
杳然』　一たび棹して中流を下る』

梅辺清絶〜と詠い、一目万木の梅林の見事さに竹林が映え、絵のような美しさの中、ほのかな香りに包まれた春風に、五月川の舟下りを楽しむ拙堂一行の姿がある。

残念なことに、戦後ダムが築かれ、この渓谷は一変したが、梅林は今も絶景を称えている。

齋藤拙堂顕彰会理事長　加藤　龍宗

（注）人名と場所について

陶淵明＝東晋から劉宋の人。「帰去来の辞」が有名。酒好きで「編編酒あり」と称されている。

高啓＝元末〜明初の人。多作型の詩人。故郷蘇州騒乱の中で非業の死を遂げる。

林和靖＝宋の詩人林逋。庵を西湖の弧山に結び作詩。死後、和靖を諡される。

弧山＝浙江省杭県の西湖のほとりにある景勝。

羅浮＝広東省の山。山麓は梅の名所として知られる。

鄧尉＝江蘇省蘇州の景勝地。この地の梅林は、梅花鑑賞の長い歴史を誇る。

拙堂と経世

副会長　近影

齋藤拙堂は寛政九年（一七九七）に江戸柳原（現在の東京都千代田区和泉町）の津藩邸に生まれ、文政三年（一八二〇）二十四歳で津藩校有造館の句読師に任ぜられ津に移る。弘化元年（一八四四）四十八歳で津藩校督学に就任、安政六年（一八五九）六十三歳で退官、慶応元年（一八六五）六十九歳で没したが、拙堂の生きた時代は、まさに内憂外患、激動の時代であった。学者（儒学・漢学）教育者、詩文家、経世家など多面的な才能を発揮したが、自分の本領は経世済民（世を治め、人民を救うこと）の仕事であると考えており、国内外の諸問題について、多くの書を著し、啓蒙活動を行った。

当時、幕府も諸藩も深刻な不況を反映して財政事情が悪化するなか、天保三年（一八三二）には、天保の飢饉が始まり、各地で一揆が勃発するなど社会情勢は悪化した。一方で、拙堂が生まれた頃はロシア、次いでイギリス、退官の頃にはアメリカが鎖国下の日本に開国、交易をもとめるなど異国船の来航が大きな問題となった。こうした状況下、拙堂は「地理挙要」（上・下巻）を著作し、蘭学者によって翻訳された外国の地理書、見聞録、交易文書の目録を作成、また南下するロシアの事情に注意することを「魯西亜外記」二巻で、加えて日本を知り日本の進むべき方向と世界各国の軍備の状況を「地学挙要」に著した。さらに、イギリス・清国間のアヘン戦争勃発の翌年（一八四一）「海防五策」を著し、国防には国土の大きさ、兵の強さ、兵器の優秀さの三つが必要なこと、戦略、軍事訓練の重要なこと、蝦夷地、琉球の防衛の重要性、文化的侵略の危険性を述べた。

嘉永六年（一八五三）ペリーの浦賀来航後「制慮事宜」において、異国船打ち払いの無謀なこと、アメリカとの和親条約は一旦受け入れるが、交易は五年限りで認め、お互いに利益があれば続ける。そしてこの五年間に砲台の築造、巨砲の鋳造、戦艦の建造により戦う準備をするという方策を述べ、外国事情の研究とその対応策を幕府、藩に献策した。

鎖国下の日本にあって、西欧列強が日本に開国を迫る意図を的確に分析、対応策を考えていた拙堂をはじめ当時の開明的な知識人が、日本の植民地化を防いだものと言えよう。

現在、中国の膨張主義、ロシアの冒険主義、北朝鮮の核兵器・弾道ミサイル保有など不安要因がなお周辺にあり、日本の安全保障上問題をなしとしないが、拙堂だったらどんな対応策を考えるのか、興味のあるところである。

齋藤拙堂顕彰会　副会長　飯田俊司

津公園内・拙堂齋藤先生顕彰碑の清掃完了

会報第五号の平成三十年度事業でお伝えした津公園内の「拙堂齋藤先生碑」の苔類の剥離と洗浄について、株式会社お墓掃除本舗により、本年六月四日から七日にかけて清掃が行われ、無事完了いたしました。

作業をする上での足場は、株式会社西出のご尽力で構築され、碑の清掃はお墓掃除本舗の手洗い方式で御影石に付着した長年の埃、乾燥苔、水垢、カビと思われる付着物が洗い流され、汚れのために埋まった漢字文字は一画ごとに清掃されています。同社によれば、漢字に白文字を入れると、より分かりやすくなるとのことです。

なお理事会は六月十四日（木）午前、現地に集合、清掃完了後の拙堂齋藤先生碑を見学しました。

多くの人に愛される拙堂先生の顕彰碑であることを期待し報告とします。

清　掃　前

清掃後・足場撤去前

齋藤拙堂墓地に説明板の設置

安濃津観光ガイド会・津観光ガイドネットにより四天王寺内の齋藤拙堂墓地に、説明板が設置されました。同寺は津市内の名刹で歴史探訪者の来訪も多く、説明板は判り易いと好評です。

墓石・説明板

吟道大会の開催

平成三十一年三月二十四日（日）津センターパレス二階の中央公民館で、第三回齋藤拙堂顕彰吟道大会が、主催津市吟剣詩舞道連盟、共催津市、後援齋藤拙堂顕彰会によって開催されます。

詳細は関係者宛に別途通知されます。

拙堂顕彰碑の説明板にQRコードを設置

かねて津市観光ボランティアガイドを始め関係方面から、津公園内の拙堂顕彰碑説明板に、碑文の原文、読み下し文、現代語訳を内容とするQRコードの表示が希望され、齋藤会長および津市教育委員会のご尽力でこのほどその設置が実現しました。

スマートホンご利用の方はどなたでも閲覧ができます。精々活用下さい。

第三回『俳句・短歌』作品募集

別便で案内した通り、募集期間が平成三十年十月一日（月）から同年十二月十日（月）となりました。

テーマは齋藤拙堂・齋藤拙堂を取り巻く人々・有造館・津城・津の街・**津の海**・**津の祭**・**津の風景**・**高田本山**等です。

ゴチックで表示した部分は、今年から増えたテーマです。

応募方法は、**官製はがき一枚**に五作品。自作・未発表の作品で、俳句・短歌いずれも一人五作品以内です。これも昨年と異なる個所はゴチックにしました。

発表は平成三十一年三月二十四日（日）で、昨年同様、第三回齋藤拙堂顕彰吟道大会で表彰されます。

第二回『小中学生書道展』作品募集

別便で案内した通り、募集期間は平成三十年十二月十日（日）から平成三十一年一月二十二日（火）です。

課題は小一＝おしろ　小二＝みどり　小三＝せつどう　小四＝入徳門　小五＝有造館　小六＝拙堂文話

中学生＝月瀬記勝

小学生は楷書、中学生は楷書または行書作品展の会期は平成三十一年二月九日（日）から二月十一日（月・祝）

場所は津リージョンプラザ三階

月ヶ瀬観梅バス旅行

三十年度事業の中の『月ヶ瀬』観梅バス旅行は三十一年三月十七日（月）に行われます。会員優先・先着四十名となります。詳細は**九月二十八日付別便**の行事案内通知文に記載されています。

拙堂今昔
（江戸言葉）

江戸生まれの拙堂が、津藩校の学職に任用され津へ転居したのは文政三年二十四歳の時である。言語の発音にかかるイントネーションの多くは、幼少の時期に身につくようで、環境が変わってもその抑揚はすぐに改まるものではない。尤も、拙堂の場合は父君が伊賀の出身であり、津を古里とする津藩上屋敷の中で育っているから津地方の方言にも馴染んでいたであろうが、江戸では、日常的に江戸言葉を使っていたと思われる。

『東京語の歴史』（杉本つとむ著）によると明和・安永（1764～）から文化・文政（～1831）にかけてが江戸言葉＝江戸語が最も発達した時期で、やがて全国共通語の資格を獲得している。この時代は、拙堂の江戸における成長期でもある。

同書によれば、江戸語には「江戸語」と「江戸詞（えどことば）」という二つの体系があり、前者は正則的、公的な場合に武士・学者等によって用いられ、後者は変容的で市民間の親しい会話に用いられている。昌平黌で学んだ拙堂は、正規の「江戸語」で堂々の論陣を張り、市井にあっては親しみのある「江戸詞」で話をしていたものと思われる。

昌平黌・入徳門

また「江戸っ子気質」も江戸言葉が標準化する時期に確立したとある。

拙堂に「…暁天髣髴鳴鵬過　錯作頭魚叫賣来」（あかつきにホトトギスがかすかに鳴けば、初ガツオを売りにきたのかと錯覚する）という絶句があるが、まさに江戸っ子の面目躍如、初カツオを待つことしきりなるものがある。因みに初鰹の値段は、「江戸の家計簿」（磯田道史著）によれば一本、高値で二両二分とのこと。現代の価格では如何ほどになろうか。

それはさておき、津市郷土史の大先達、梅原三千先生によれば、「拙堂先生はいたって話し好きで、胸中にわだかまりのないお人柄で、なかなかに如才なく一向に驕り高ぶる風がない。そこで有造館の入学者も激増する。文武の修業も進歩する。学校は先生の時代に全盛の頂点に達した」（旧・拙堂会報第一輯）とあるが、これに加えて、歯切れの良い江戸前の語り口が、弟子達を雲霞の如くに引き付けた一つの要因ではなかったろうか。

（文責　塚澤　正）

会員一覧

（平成三十年九月三十日現在）

団体会員（順不同・敬称略）

伊藤印刷株式会社
岡三証券株式会社津支店
株式会社ＺＴＶ
株式会社百五銀行
株式会社百五総合研究所
株式会社百五ディーシーカード
百五リース株式会社
百五証券株式会社
株式会社ヘルシーファミリー
株式会社半泥子廣永窯
株式会社刀根菓子館
公益社団法人日本吟道学院水心会
公益社団法人日本詩吟学院津岳風会
三重交通株式会社
ミフジ株式会社
二松学舎大学松苓会三重県支部朋友会
錦水流淡翠吟詠会
水洋流詩吟朗詠会
藤貴流扇和会三重県本部
社会福祉法人三鈴会さくら保育園
比佐豆知神社

（二十一団体）

個人会員（順不同・敬称略）

赤塚　泰裕
赤野　多恵
阿部　みどり
飯田　俊司
石野　孝廣
板谷　ツヤ子
伊藤　歳恭
伊藤　武治
伊藤　鐐造
稲垣　武嗣
井上　明美
上島　正明
上田　豪
内田　観成
梅田　安春
海老原　初夫
大井　和人
岡　重夫
小川　直紀
奥田　榮子
奥田　則子
葛山　丕
勝眞　千代
加藤　栄
加藤　龍宗
金児　玲子
川合　俊平
河村　ツタ子
神田　奉真
木崎　真陽
喜田　恭子
北畠　久子
木下　昇
紀平　奉剣
草深　観雙
楠　久子
雲井　敬
栗真　恵光
國分　昭男
児玉　進
粉川　孝英
小林　貴虎
齋藤　正和
齋藤　国子
齋藤　正晃
齋藤　正人
酒井　宏明
下村　尚治
菅野　克也
杉浦　雅和
世古　浩
高倉　ふじ子
武田　奉明
竹村　観扇
田中　秀人
田辺　礼子
谷口　定男
種田　真山
種田　啓子
田矢　修介
塚澤　洋
塚澤　正
辻本　當
土田　隆司
津村　観耀
寺尾　正紀
寺田　観啓
冨田　陽子
豊田　龍倭
内藤　華博
内藤　奉悠
中川　左和子
中川　禎二
中川　弘文
中津　忠夫
中根　利彦
中野　清
中村　昭子

中村　美知子
西川　幾子
西田　きみ子
野崎　耕治
長谷川　和秀
畠山　彦和
林　朝子
林　竹生
林　忠男
林　信吾
久岡　克美
深見　和正
福島　弘太郎
福　正直
藤井　奉修
藤貴　静扇
淵脇　實博
別所　富貴子
本田　三千子
増田　幸恵
増田　迪子
松井　幸子
松村　勝順

水谷　観瑤
水谷　忠弘
水谷　忠文
水谷　千春
見並　勤子
宮野　一郎
向坂　和也
村田　修
村田　文男
森永　千寿
森永　敏江
森永　昌雄
安村　久仁男
柳川　隆一
山川　雄三
山家　泉
山崎　龍雄
山崎　満世
山本　三千代
米田　豊山
若林　宏幸
渡邊　義彦

（個人・一二三名）

役員一覧（順不同・敬称略）

（平成三十年九月三十日現在）

会長　齋藤　正和
副会長　飯田　俊司
理事長　加藤　龍宗
常務理事　中川　禎二
理事　伊藤　誠司
同　稲垣　武嗣
同　岡　重夫
同　小川　直紀
同　小林　貴虎
同　種田　真山
同　塚澤　正
同　中川　左和子
同　林　朝子
同　水谷　忠文
同　三藤　治喜
同　安村　久仁男
同　山崎　満世
同　米田　豊山

（理事・十八名）

監事　菅野　克也
同　藤貴　静扇

（監事・二名）

顧問　前葉　泰幸
同　上田　豪

（顧問・二名）

会報への寄稿のお願い

拙堂会会報について、多くの方々にご参加いただき、より充実した会報に育てるべく、会員の皆さまからの原稿をお待ちしております。

テーマは拙堂の幅広い学識と経験に対応、「拙堂について」といたします。著作についての随想、逸話の紹介、漢文の現代語訳などどのような観点からでも結構です。紙面の許す限り掲載する方針です。

字数は当面１０００字以内とします。

何時でも受付けていますので、**事務局あて**ご送付下さい。

（会報担当　塚澤）